

18. 柔道強化選手と比較した大学柔道選手の精神的特徴

金沢学院大学 渡辺 涼子
金沢学院短期大学 渡辺 直勇
大阪産業大学 内村 直也
玉野スポーツセンター 藤本 誠
大阪心理技術研究会 船越 正康

18. The Mental Character of University Judo Players compared to the All-Japan Players.

Ryoko Watanabe (Kanazawa Gakuin University)
Naotake Watanabe (Kanazawa Gakuin Junior College)
Naoya Uchimura (Osaka-Sangyo University)
Makoto Fujimoto (Tamano Sports Center Inc.)
Masayasu Funakoshi (Osaka Society for Study of Psycho-Diagnostic Method)

abstract

The UK Test was carried out for the 64 members of the K-University judo team in 1998 and 2008. Base on the results of the test, the differences in the sex and the year transition regarding the four categories of the UK standard, which are necessary for victories, are examined. The results of the researches are as follows.

- 1) Many of the players of the K-university judo team, following the all-Japan players for the special training, had the character of artisan spirit which was suitable for judo.
- 2) But it was admitted that the mental health level of the K-University players were inferior to the all-Japan players and tended to be declining for these ten years.

- 3) The phenomenon of the decline in the mental energy level, which was spreading among the all-Japan players, were also admitted among the K-University players.
- 4) Despite the negative signs discussed above in the 2) and 3), many players of K-University showed more rising curved lines than the all-Japan players.

The victory pursuit and judo education are concomitant, being able to respect individuality and to practice the judo which rose mental health and energy level. The coaching should aim at making efforts to train the players in the right direction of the competitive judo, regardless of the their skill level, to be highly-motivated and persistent players.

1. はじめに

内田クレペリン精神検査（UK法）を用いたスポーツ適性研究では競技水準が高くなるほど特定個性（人柄類型）が集中し^{1) 4) 5) 7)}、精神的健康水準の高い選手ほど好成績を残す^{9) 10)}ことが確認されてきた。この傾向は柔道に関しても同様であり、加えて心的エネルギー水準（作業量段階）の高い選手と上昇曲線を示す選手が好結果を残す法則性が^{14) 16) 17)}明らかにされた。蓄積された知見は国際大会代表選手のサポート¹⁵⁾やSr.およびJr.強化選手の競技力向上^{6) 11) 12) 18)}にも活用されている。しかし、これらの法則性の中で強化選手の心的エネルギー水準に関しては、一般大学生の基準であるA段階以上が減少してB段階以下が増加する傾向が指摘され始めた。その傾向は大学柔道部員についても同様であり、国際試合における不安定な戦績と併行して期待されながら伸び悩む選手の指導の上で一考を要する問題である。

UK法によればスポーツマンが明朗・快活、積極的・行動的、辛抱強く努力家と称される背景に、身体運動によって健康な運動興奮を生活化³⁾している姿がある。一方で不健康な運動興奮を野放しにして衝動的でブレーキがきかず、解禁止現象²⁾に代表される暴力や反社会的行動¹⁹⁾になることも検証済みである。試合で勝ちきれない選手や無気力・投げやりな選手の背景心理は下降曲線¹³⁾に象徴される。運動によって褒め言葉で語られるスポーツマン的性格が実際に形成される一方で、勝利追及に偏ると思考停止や付和雷同、マンネリズムやステレオタイプの言動に結びつく。それらは知らぬ間に心的エネルギーの成長を阻害し、自分勝手やバーンアウトに繋がる精神の不健康を増長する因となるものである。

そこで本研究では、データを収集して10年を経過した私立K大学柔道部と全日本強化選手のUK検査結果を比較し、現在における柔道選手の精神的特徴と競技柔道の課題を明らかにする。競技力向上と並行して柔道を通じた人間教育を目指す指針となれば幸いである。

2. 方法

K大学柔道部員には1998年10月と2008年5月の2回、UK検査を実施して整理・集計を行った。対象は1998年に男子16名・女子13名、2008年に男子25名・女子10名の計64名である。UK分析については性別特徴と年次推移をとり上げ、人柄類型・精神健康度・作業量水準・曲線傾向の4項目ごとに出現率を求める。全日本強化選手との比較には1998年と2008年1月および7月に行われたUK検査結果を用いる。その対象は、1998年が男子82名と女子66名の計148名。2008年が男子54名と女子38名の計92名、総計240名である。出現率の差は χ^2 値とCR

値⁸⁾によって確認し、差の検定には有意水準5%以下をとりあげ、部分的に10%をも参照した。

3. 結果および考察

1) K大学での指導理念と指導経過

K大学柔道部の創設は平成7年4月、それまではK女子大学として女子のみの活動であったが、男女共学を機に男子部員も加わり柔道部として新たなスタートを切った。指導者としては教育と強化の両面から選手の育成を心がけ、いずれは地域から世界へ羽ばたく選手を育てることを目標に指導を始めた。今年で13年になるが男女ともに地区大会の予選を突破する力がつき、現在では全国レベルで戦う選手が育ってきた。これまでの主な競技成績は以下に述べる通りである。

男子は団体戦において北信越大会で平成9年に初優勝して以来今年で12連覇、個人戦では全日本学生で3位に入賞した選手や全日本ジュニア強化選手が各1名出るなど全国レベルの力をつけてきた。女子においては団体戦では北信越大会で平成16年に初優勝してから4連覇、全国大会では4年連続全国大会ベスト16、個人戦では全日本学生で3位3人、2位1人(2年連続)、全日本ジュニア2位1人、3位1人、世界学生3位1人の成績を残しており、そのうち1名は現在も全日本ジュニア強化選手として活躍している。選手は全国から集まるが、高校時代にトップレベルの成績を残した選手は殆どいないため大学4年間で力をつける選手が多い。好成績を残す選手は競技に対する目標が明確であり、練習・トレーニング・大学生活に懸命に取り組む姿勢を見せている。しかし試合においては経験が少ないのか気が優しいのか、力は持っているものの攻撃性に欠け、ここ一番で力を出し切れない傾向がある。

2) UK分析結果

②人柄類型分布：男女別人柄分布と人柄2分類の出現率を表1と表2に示した。男女ともに8分裂型が最も多く64人中31人(48.4%)、次いで3-1dじっくり型(21.9%)、5地道粘り型(7.8%)、3-2温和型(7.8%)の順に7類型が認められた。8分裂型と3-1dじっくり型を合わせると全体の7割に達する。スポーツでは競技水準が上がるにつれて特定人柄が多出する。とくに柔道では名人肌や職人気質の8分裂型が増える傾向にあり、3-1d > 5 > 3-2と続く。今回の結果は、強化選手並みに8分裂型が多く、次いで3-1dじっくり型を中心に真面目で堅実な人柄の多いことが性差や年次推移に関係なく示された。活動派が一人もいないので、ともすると明るさに欠けやすくなりがちである。実際の練習中に一度ペースが落ちてしまうと立て直しをすることができない場面に遭遇する。指導を行う場合は、その点を留意した練習での雰囲気作りを大切にしたい集団である。

表1 K大学柔道部の人柄分布：人(%)

Table 1 Character distribution of K-university

Name of character type	Male	Female	Total
3-1d: careful	12	2	14(21.9)
3-2: gentle	3	2	5(7.8)
5: steady	2	3	5(7.8)
7: stable	3	1	4(6.3)
8: introverted	19	12	31(48.4)
9: noticeable	·	1	1(1.6)
10: tenacious	2	2	4(6.3)
Total	41	23	64(100.)

表2 性別人柄2分類の男女合計：人(%)

Table 2 Two classes of character classified by sex

Character	Male	Female	Total
Type 8	19(46.3)	13(56.5)	32(50.0)
Another	22(53.7)	10(43.5)	32(50.0)
Total	41(100.)	23(100.)	64(100.)

$$X^2(2 \times 2) = 0.609 -$$

②精神健康度分布：表3に精神健康度分布の年次推移（男女合計）を示した。'98年には精神健康度 高+中上度の割合が最も高く48.3%、次いで中度が41.4%であったが、'08年には 中下+低度の割合が42.9%と最高値を示した。その中でも特に、中下+低度が'98年10.3%に対し'08年は42.9%に増加していることが分かる。これは表4に示したように男子の'98年は低度者が一人も見られなかったが、'08年は12人（48.0%）と明らかに増加していることが原因である。女子については 高+中上度が47.8%と最も高い値を示していたが、出現率に年度差は認められなかった。柔道においては健康度と戦績の関係が明らかであり、健康度の高い者が好成績を上げ低い者は入賞しにくいことが確認⁹⁾ ¹⁰⁾ されてきたが、オリンピック代表選手¹⁵⁾ ともなると高+中上度が9割近くを占めていた。K大学柔道部では高+中上度が男子36.3%、女子47.8%に止まっており、今後健康度を高める指導によって成績を上げることが可能になる。

③ 作業量水準：精神健康度水準と作業量とは正の相関を示すので、心的エネルギー水準を表す作業量との関係も重要である。心的エネルギー水準の年次推移を表5と表6に示した。表5に見る通り男女全体64名の年次推移は有意水準10%の範囲であるが、10年間の作業量分布に差が認められた。一般成人水準A段階が全体の48.4%と約半数を占める中で高能率のⒶ段階が31.0%から14.3%へ減少し、発達遅滞のB+C段階が17.2%から40.0%に増加した。この傾向は男子中心に現れ、表6に見る通り有意水準は10%水準であるが5%での χ^2 値=5.991に近く、10年間の作業量推移に差が認められた。すなわち高能率のⒶ段階が37.5%から8.0%へ減少し、発達遅滞のB・C段階が増加した。

④ 曲線傾向：男女ともに出現率に差がなく、年度差も認められなかった。表7に男女を合計した曲線傾向の年次推移を示した。3分類比は上昇>平坦>下降の順であるが統計誤差の範囲に

表3 精神健康度の年次推移 男女合計：人 (%)

Table 3 Annual transition of level of mental health

Mental health	1998	2008	Total
High. Middle high	14(48.3)	12(34.3)	26 (40.6)
Middle	12(41.4)	8(22.9)	20 (31.3)
Middle low. Low	3(10.3)	15(42.9)	18 (28.1)
Total	29(100.)	35(100.)	64 (100.)

$$\chi^2=.464 > 7.824 (p=.02 \text{ df}=2)$$

表4 精神健康度の年次推移 男子：人 (%)

Table 4 Annual transition of level of mental health

Mental health	1998	2008	Total
High + Middle high	7(43.8)	8(32.0)	15 (36.6)
Middle	9(56.2)	5(20.0)	14 (34.1)
Middle low + Low	0(0.0)	12(48.0)	12 (29.3)
Total	16(100.)	25(100.)	41 (100.)

$$\chi^2(2 \times 2)=11.80 > 10.6 (p=.005 \text{ df}=2)$$

表5 心的エネルギー水準の年次推移 男子：人 (%)

Table 5 Annual transition of level of work amount

Efficiency of work amount	1998	2008	Total
Ⓐ	9 (31.0)	5 (14.3)	14 (21.9)
A	15 (51.7)	16 (45.7)	31 (48.4)
B+C	5 (17.2)	14 (40.0)	19 (29.7)
計	29 (99.9)	35 (100.)	64 (100.)

$$\chi^2(2 \times 2)=4.919 > 4.605 (p=.10 \text{ df}=2)$$

$$\chi^2(14:31:19)=7.157 > 5.991(p=.05 \text{ df}=2)$$

$$CR(14:31)=2.53^*$$

表6 心的エネルギー水準の年次推移 男女合計：人 (%)

Table 6 Annual transition of level of work amount

Efficiency of work amount	1998	2008	Total
Ⓐ	6 (37.5)	2 (8.0)	8 (19.5)
A	7 (43.8)	13 (52.0)	20 (48.8)
B+C	3 (18.7)	10 (40.0)	13 (31.7)
計	16 (100.)	25 (100.)	41 (100.)

$$\chi^2(2 \times 2)=5.875 > 4.605 (p=.10 \text{ df}=2)$$

ある。目的達成行動では意欲・勢い・粘りを象徴する上昇曲線を示す選手の成功率が高い。次いで安定性のある平坦曲線までが柔道では好成績を上げる。K大学の柔道部は上昇曲線を示す選手が最頻数のため、やり方次第で目標の達成が期待できよう。指導者は選手の発達段階に即して、意欲の高まる適切な目標設定と練習プログラムの工夫が必要である。

3) 全日本強化選手との比較

全柔連強化委員会科学研究部には30年を越すUKデータの蓄積があり、特定のパーソナリティ傾向や精神的健康水準の高さは競技成績と関連することが明らかにされている。そこで2008年に実施した全日本強化選手のUK結果とK大学柔道部との異同を比較した。

① 人柄類型比較：表8に人柄2分類の出現率を示した。強化選手は8分裂型が92人中64人(69.4%)と2/3を越えた。これはソウルオリンピック時(32.4%)と比べて倍以上の高い値を示す。8型は常に男子の出現率が高いけれども国際試合⁵⁾で好成績を上げ始めて以来、女子の8型出現率も男子に接近する現象がある。一方、K大学柔道部においても8分裂型は48.6%を占めているが強化選手に比べると少なかった。この20年間で名人肌・職人気質の強化選手が増加する中で、下位集団であるK大学柔道部の人柄構成も同一傾向を示すことは適性論から見た必然であろう。

② 精神健康度比較：2群別精神健康度水準の比較を表9に示した。強化選手は高+中上度が51.1%、半数以上の選手が高健康の集団であった。しかしK大学柔道部は中下+低度が42.9%と最頻度を示し、高+中上度は34.3%に止まっていた。表10に

示した強化選手の精神健康度別年次推移には、1998年に対して2008年に高+中上度が減り中下+高度が増える現象が見られる。K大学柔道部はこれよりも更に低い値を示していた。精神健康度の高さは戦う選手にとって必要条件である。精神的に健康な人は自ら楽しく生き、その楽しさ

表7 曲線傾向の年次推移 男女合計：人(%)

Table 7 Annual transition of tendencies of UK curve

3 shapes of curve	1998	2008	Total
Rising	10 (34.4)	16 (45.7)	26 (40.6)
Flat	11 (37.9)	11 (31.4)	22 (34.4)
Down	8 (27.6)	8 (22.9)	16 (25.0)
Total	29 (100.)	35 (100.)	64 (100.)

$$\chi^2(2 \times 2) = 8.28$$

表8 人柄2分類の比較：人(%)

Table 8 Comparison of two classes of character

Character	Athlete for special training	K-university	Total
Type 8	64(69.6)	17(48.6)	81(63.6)
Another	28(30.4)	18(51.4)	46(36.2)
Total	92(100.)	35(100.)	127(100.)

$$\chi^2(2 \times 2) = 4.837 > 3.841 (p = .05 \text{ df} = 1)$$

表9 精神健康度の比較：人(%)

Table 9 Comparison of level of mental health

Mental health	Athlete for special training	K-university	Total
High+ Middle high	47(51.1)	12(34.3)	59(46.5)
Middle	25(27.2)	8(22.9)	33(26.0)
Middle low +Low	20(21.7)	15(42.9)	35(27.5)
Total	92(100.)	35 (100.)	127(100.)

$$\chi^2(2 \times 3) = 5.825 > 4.606 (p = .10 \text{ df} = 2)$$

表10 全日本強化選手精神健康度の年次推移 男女合計：人(%)

Table 10 Annual transition of level of mental health

Mental health	1998	2008	Total
High. Middle high	95(64.2)	47(51.1)	142(59.2)
Middle	36(24.3)	25(27.2)	61(25.4)
Middle low. Low	17(11.5)	20(21.7)	37(15.4)
Total	148(100.)	92(100.)	240(100.)

$$\chi^2(2 \times 2) = 5.696 > 4.605 (p = .10 \text{ df} = 2)$$

$$\chi^2(T) = 75.675 > 13.8 (p = .001 \text{ df} = 2)$$

$$\chi^2 = 24.5 > 13.8 (p = .001 \text{ df} = 2)$$

を他者が喜んで承認する状態を自力でつくりだしている。選手自身が自立した姿で目的達成に向かうことができるように、健康度の低い選手のコーチングを工夫していく必要がある。

③ 作業量段階比較：表11に作業量段階別出現率を示した。強化選手はⒶ段階59.8%が最も多く、A段階の29.3%と合わせて8割以上を占めていた。一方、K大学柔道部ではⒶが僅か14.3%、B+Cが40.0%に達していた。UK法における作業量は心的エネルギー水準を示し、中卒年齢でA段階通過率が50%に達しているのが一般的である。大学生では必然的にA段階以上が圧倒的多数を占め、柔道でも強化レベルが上がるにつれてⒶ段階が増える。ところがシドニーオリンピックの頃から全日本Jr.の作業量水準が低下し始め、現在では

大学強化選手全体の傾向になりつつある。K大学でも同様の傾向を示しているので、これまでの自主・自由・自立を標榜する課外活動の理念と指導プログラムの再構成が必要となろう。B・C段階は言われてできる範囲を拡大し、徐々に自己決定の機会を増やすことによってA段階への発達を促すコーチング配慮が不可欠である。

④ 曲線傾向：表12に曲線傾向の出現率を示した。意欲・勢い・粘りを象徴する上昇曲線は強化選手25.0%に比べてK大学柔道部は45.7%と高かった。強化選手の個性・精神健康度・心的エネルギー水準には達しないが、K大学の柔道部員は意欲的に取り組むものが多いことを示すものである。個性を伸張して心的エネルギー水準を高める指導の下で、精神的に健康な大学生として成長する働きかけがあれば、これからの柔道における好成績が期待されると考えられる。

4. 要約

私立K大学柔道部員 64名に実施した1998年および2008年のUK検査結果を下に、勝利達成に必要なUK基準4項目の出現率について、性差と年次推移の検討を行った。同様の2年次に実施した全日本強化選手 240名のUK結果と併せて、両柔道集団の精神的特徴について比較検討を試みた。結果は次の通りである。

- 1) K大学の柔道部員は、全日本強化選手に準じて柔道向きの職人気質・名人肌の個性が多かった。
- 2) しかし精神健康度水準は強化選手に及ばず、10年間で明らかに低下する傾向が認められた。
- 3) 強化選手に浸透しつつある心的エネルギー水準の後退現象は、K大学においても同様に確

表11 心的エネルギー水準の比較：人 (%)

Table 11 Comparison of level of work amount

Efficiency of work amount	Athlete for special training	K-university	Total
Ⓐ	55 (59.8)	5 (14.3)	60 (47.2)
A	27 (29.3)	16 (45.7)	43 (33.9)
B+C	10 (10.9)	14 (40.0)	24 (18.9)
計	92 (100.)	35 (100.)	127 (100.)

$$\chi^2(2 \times 2) = 24.5 > 13.8 (p = .001 \text{ df} = 2)$$

表12 曲線傾向の比較：人 (%)

Table 12 Comparison of tendencies of UK curve

3 shapes of curve	Athlete for special training	K-university	Total
Rising	23 (25.0)	16 (45.7)	39 (30.7)
Flat	32 (34.8)	11 (31.4)	43 (33.9)
Down	37 (40.2)	8 (22.9)	45 (35.4)
Total	92 (100.)	35 (100.)	127 (100.)

$$\chi^2(2 \times 3) = 5.696 > 4.605 (p = .10 \text{ df} = 2)$$

認された。

- 4) 上記2) ,3) の負の徴候が見られる中で、強化選手以上に意欲的な上昇曲線を示す選手が多かった。

個性を尊重し、精神的に健康で心的エネルギー水準の高まる柔道実践が可能ならば、勝利追求と柔道教育は並立する。競技水準に関係なく競技柔道の進むべき方向に、意欲的で勢いのある粘り強い選手が育つコーチング努力を待ちたいものである。

5. 参考文献

- 1) 田中秀雄：1962 勝負の世界,誠信書房.
- 2) 小林晃夫：1970 内田クレペリン精神検査法による人間理解 誤答論 後編,1-1,101-140 東京心理技術研究会.
- 3) 辻野 昭：1980 体育科教育の理論と展開 身体活動と心のはたらき1-4,46-66.
- 4) 小林晃夫：1986 スポーツマンの性格-性格からみた運動技能への道, 杏林書院.
- 5) 高橋邦郎：1988適性論から見た柔道選手の特徴とオリンピック適応—特に精神的側面から、スポーツ医・科学研究報告, II-12-9,155-159,日本体育協会.
- 6) 船越正康：1988.3 スポーツ選手のメンタルマネジメントに関する研究—第4報—, 10-19 (財)日本体育協会スポーツ科学委員会.
- 7) 船越正康：1989.3適性論からみた柔道選手の特徴とオリンピック適応—特に精神的側面から—, 競技種目別競技力向上に関する研究 第12報, 155-159,日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会.
- 8) 岩原信九郎：1991 教育と心理のための推計学,166-175,日本文化科学者.
- 9) 船越正康：1991.3 柔道選手の競技適応—国際試合を中心に—, 競技種目別競技力向上に関する研究 第16報, 62-69, 日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会.
- 10) 船越正康：1994 柔道選手の競技適応—ハミルトン世界選手権大会を中心に—, 競技種目別競技力向上に関する研究 第17報, 114-122,日本オリンピック委員会スポーツ医科学委員会.
- 11) 船越正康：1997.7 選手とコーチのためのメンタルマネジメント, 実践プログラム柔道,2-3,212-243,大修館.
- 12) 船越正康：2000.9 メンタルトレーニング研究の課題, スポーツ心理学研究,27-1,39-49, 日本スポーツ心理学会.第一法規.
- 13) 船越正康：2002 競技適応の心理—UK法による勝敗予測指標の検討,69-79, 講道館科学研究会紀要.
- 14) 船越正康：2003 UK法から見た競技適応研究—全日本女子柔道体重別選手権出場選手のデータ分析から、講道館、柔道 74-1, 90-96.
- 15) 船越正康：2005 アテネオリンピックのメンタルサポート —日本代表選手のUK分析から—, 14, 143-157, 講道館柔道科学研究会紀要.
- 16) 船越正康：2004 UK法の曲線理論に基づく柔道の勝敗予測-全日本Jr.強化選手対仏ナショナルチーム戦から6, 1-12 柔道科学研究.
- 17) 船越正康：2007 個性別競技適応行動の研究—感受性の繊細な柔道チャンピオンの事例～自己記載と再検証—,173-187, 講道館科学研究会紀要.

-
- 18) 松本純一郎：2000 Sr.と比較したJr.柔道強化選手の精神特徴—全国中学校柔道大会優勝校に関する事例研究—,第17巻第1号,11-21,大阪武道学研究.
 - 19) 船越正康：2008柔道コーチング論, V人間理解に基づくコーチング, 93-211,柔道選手育成研究会